光受寺通信

NO. 203
R7・12・1 発行
発行元 光受寺

近年は、年々発行される年賀状が少なくなってきているそうだ。若い年代層においては、全く書かないという人も少なくないという。

そのことが良いか悪いかはともかくも、人間関係が希薄化してきたことや携帯、スマホの普及によってメールで簡単にすまそうとする思いが主流になってきてからなのだろうか。

そしてついには「年賀状じまい」の思いの加速となった。年々人恋しくなってくる老人にとっては寂しさが募る。私にとっての年賀は、一年間のご無沙汰に安否を思い、一文字一文字にその人を思い起こしながら近況を知らせ合うことが、心に安らぎでもあり、新しい年への一歩を踏み出す希望ともなっていたものだった。

確かにスマホは近況を知らせるにおいても直接的で、効率的であることに間違いはない。この魅力には年賀状を書くというアナログではとうてい太刀打ちはできないことであろう。しかし、この一枚一枚に思いを込めて書く年賀状の「面倒くささ」にノスタルジックな魅力があることを思うと、大切にしていきたい日本の文化でもあると思っている。

また、こういった風潮は年賀状にとどまらず。「何々じまい」が流行のように広がりつつもある。「墓じまい」に「仏壇じまい」と、先祖まで切り棄てていってしまう昨今である。挙句の果ては終活ともなり、何のために生まれ、何のために生きてきたのか、人生の総括がこれなのかと思うと、寂し過ぎる気がしてならないのである。

「終活」と「往生」とは関係ないことを知っておくべきであろう。

皆様の思いに支えられて
「お寺サロン」3周年記念となりました。

かつてお寺の存在意義が問われていることに危機感を覚え始めた頃、「お寺は単なる風景となってしまった」という声を聞いたことがありました。

それは大変ショックな言葉ではありましたが、適格に言い当てられた言葉のようにも思えました。それ以来、お寺の存在意義を認めていただけるようにと様々な取り組み活動を続けてまいりました。「お寺サロン」はその一環として三年前に2ケ寺の若院が始めた活動です。

今回は光受寺が会場となり、廣専寺若院による「仏教小話」に引き続き、光受寺若坊守によるエレクトーンミニコンサートを催すことになりました。

仏教小話では、妙好人として有名な赤尾道宗にまつわるお話をいただきました。以前、光受寺でもバスツアーで道宗にゆかりのある寺、五箇山の行徳寺に参拝したことがありますが、道宗は『蓮如上人御一代聞書』も出てくるほど真宗門徒として信仰の篤い方でした。以前の光受寺通信で何度も御紹介したことがあります。

ミニコンサートでは仏教讃歌はもちろん演歌まで演奏され、皆さん大いに楽しんでいただけたと思っています。左記『衆会』は仏教讃歌の一つです。初めて歌う歌のようで皆さんチョット戸惑気味でした。最後の締めは「好きなった人」で大合唱。

堂内に響く歌声

衆会（しゅうえ）　波多野 仁 作詞　平井康三郎 作曲

1 この庭に　あつまる　われら　よのわざの　しなこそ　かわれ
もろともに　めぐみに　とけて　むつみあう　こころの　こえに
さんぶつの　うれしき　しらべ

2 みすがたは　こころにうつり　みおしえは　いのちにかよう
われらいま　やみよりさめて　みほとけの　ひかりのなかに
のりをきく　たのしきつどい

赤本 72ページに掲載

光受寺学習会のご報告

今回は、今年最後の学習会となりました。今年は『歎異抄』に学んでまいりましたが、あの異常とも思える暑さの関係もあってお休み月も続き、最後の「抄」までは学びきることができませんでした。

前回は歎異抄の第１４章、「南無阿弥陀仏」とひと声念仏することによって、八十億劫という果てしない時間に私が犯してきた罪を一気に消滅させることができると信じなさいということについての歎異でした。

この主張は、『観無量寿経』(下々品(げげほん)の経文)を根拠とするものであるということから、「王舎城の悲劇」のストーリーを通し、父親殺しという罪を犯したアジャセ王が、お釈迦様の説法によって救われていったという過程を知り学ぶことができました。

※下下品とは「下品下生」の略ですが、これは極楽往生する際の九つの階位の最下位の階位で、十悪五逆罪を生前に犯した人たちを指して言います。その一つが父、母を殺したという罪を背負っている人たちのことで、どうにも救われない身でありながら「一切衆生を救いとる」という阿弥陀様の願いによって救われていったのです。

正信偈には「與韋提等獲三忍」とあり、アジャセの母であるイダイケもお釈迦様の説法を聴き、三忍(喜忍・悟忍・信忍)を獲得し、救われていきました。

三忍の説明は紙面の関係で省きます。

王舎城跡

報恩講準備あれこれ。

行事や催しごとにつきものなのが準備ですが、準備のための準備も結構あるものです。

例えば一年に一度も報恩講ともなれば、仏花を生けるにしても「お磨き」が必要となりますし、またお磨きをしていただくにしても、またお磨きをしていただくための準備が諸々とあるのです。その一つに大きなお花瓶(かひん)に花木を支えるための藁を用意しなければなりません。

ただ面倒なのは葉の部分は水につけると腐りやすいので稲の芯の部分だけを使うことです。その作業はもっぱら住職の仕事になっていますので、毎日少しずつ根気強くやっています。

最近は稲藁もなかなか手に入れにくくなっていますが、幸い総代の丹羽さんがご寄付くださり、ありがたく使わせていただきました。芯はストローのようで、これを束ねて括り、花瓶の高さに合わせて切って使います。不要になった藁くずは燃やして藁灰を作り、香炉に入れると最上級の香炉灰に変身します。自然のものに無駄はありませんね。―藁は万能。自然の循環ですね―

一束を芯だけにすると
その量は5分の1以下に。

今月の掲示板

振り向かぬ子を見送れり
振り向いたときに
振る手を用意しながら

俳　万　智

子供はどこへ行こうとしているのでしょう。学校かそれとも仕事か、あるいは故郷を離れる旅立ちの時か。子供を見送る母の姿が目に浮かんできます。子供には親の思いが分かっているのでしょうか。まっすぐにただ未来を見つめて進んでいく。振り向くことはないだろうけれども、振り向いたときには思い切り手を振ってやろうと胸近くまで手を挙げている親の気持ちが痛く私の心に響くのです。―母の思いが阿弥陀如来のお慈悲にも似て。―

おしらせ

除夜会…十二月三十一日(水)
十一時四十五分～

学習会…一月十七日(土)　午後二時～
新年の会　光受寺

お寺サロン…一月　未定　午後1時半
廣専寺